



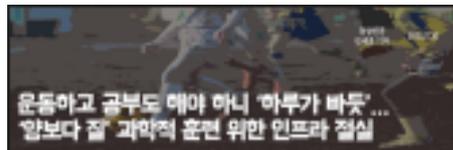
2022 年度
第 45 号

体育市民連帯 ニュースレター

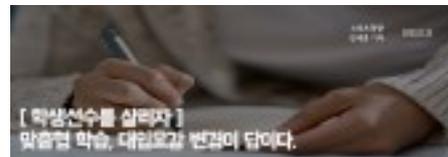
1
体育なしで始めて
体育なしで終わる
学校体育



2
運動も勉強も…
「量より質」科学的
訓練のための
インフラが切実



3
[学生選手を生かそう]
オーダーメイド型学習
大学入試要項の
変更が答えだ



4
障害・非障害学生
教師の幸せな思い出作り
感動のソウルリム運動会



5
カタールワールドカップ
労働者の人権問題など
内外のノイズが続く…
ボイコットの動きも



大韓民国スポーツの

根本的变化を

皆さんと共に

作って行きたいです

体育市民連帯と共に

していただけますか？



01 ハンギョレ 2022.11.11

「体育なしで始めて、体育なしで終わる」 学校体育



ハンギョレは2ヶ月にわたり学校体育企画シリーズを通じて体の重要性を強調しながらも制度・政策・文化で体育教育に背を向ける韓国社会の二重的姿に集中的に注目した。現場専門家たちの座談を9日、オンラインテレビ会議で開き、仁荷大学のチョ・ミへ教授（体育教育）、韓国教育課程評価院のキム・ギチョル研究員、雲山高校のイム・ソンチョル教師、月谷小学校のチャ・ミンチョル教師が参加し、スポーツチームのキム・チャングム先任記者が司会を務めた。

■ 学校体育企画、発想の大転換を契機にすべき

キム・チャングム=今回の企画シリーズに対する評価をお願いします。

チョ・ミへ=現職体育先生たちの事例から構造的な困難、専門家インタビューまで足しげく取材したおかげで、学校体育全般にわたって前に進む方向を探ってみる契機になった。問題点は多いが、訴えて嘆いて終わってはならない。より戦略的で技術的で政治的に掘り下げて未来世代の子供たちに良い体育活動環境とシステムを作らなければならない。

金ギチョル=専門的でレベルの高い懸案を時宜を得てうまく扱った。私たちが良く知っているが、仕方がないとあきらめたことを改めて認識することができた。個人的には学校スポーツクラブ政策以後、韓国で体育教育を先導するほどの画期的な政策が出ていないと感じる。今回の記事をきっかけに新しいアイデアが模索されることを願う。

イム・ソンチョル=現場で21年目の体育教師として働きながら、もどかしくて悔しくて息詰まることが多かった。記事に出てきた多くの内容を現場で経験しているので残念な気持ちがある。とても意味のある重要な報道だが、一方では果たして変わるのだろうかという気もする。毎回変化に対する希望と変わらない現実に対する絶望が繰り返されるが、根本的な大転換が必要だ。

■ 弱虫になりつつある子供たち、傍観する国

キム・チャングム=初等学校1~2学年統合教科体制で体育の空白がある。本格的な運動も3~4年生からするものだと思う。幼稚園から身体活動をするのに関連の輪が抜けるわけだ。--現場で体感する現実はどうか。

チャ・ミンチョル=現在、初等学校1~2年生の統合教科は広い意味で箸の使い方や紙飛行機飛ばしも身体活動と見なす。日常生活に必要な動きだが、健康やスポーツに必要な身体活動を体系的に扱うには限界がある。テーマ中心に学習内容が構成されているため、遊びテーマと関連した適当な名前を付けて活動が編成されたりもする。周辺の教師たちも「楽しい生活」主題に合わせて無理に作られた活動があるという点に共感する。体育教科を置きながらもいくらかでも統合できる方法があるが、一括的に統合しようとする問題になる。

イム・ソンチョル=私は中学校で4年、高校で17年教えた。韓国の生徒たちは幼稚園の時から体育活動が非常に不足している。放課後に余裕のある子供たちだけが行き、初等学校では3年生から正式な体育教育

が行われる。人生の決定的な時期に体育活動をしないうことだ。中学校に行くとき、時数も増え、学校のスポーツクラブ活動もするが、高校では再び減る。週に1~2時間だ。パンデミックを経て、学校のスポーツクラブはほぼ全滅状態だ。

金チャングム=生徒たちの体育能力も落ちたようだ。

イム・ソン Chol=胸を打つことが多い。高校時代に子供の成長がほとんど完成するが、運動が下手すぎる。ボールを投げても投球姿勢が出る子たちがクラスに数人もいない。ボールをきちんと蹴る子供もあまりいない。非常に基本的な投げ、蹴り、受けといった動作ができない。十数年間、現場で子供たちの体力が落ちているのを見ている。学生健康体力評価(PAPS・ポップス)を見ると、客観的なデータで立証される。子供たちがますます身体的に落ちているのに、国はこれを放置している。韓国社会が本当に国民一人一人の健康と幸福を追求する国なのか。一部の健康、一部の幸せだけを追求する国なのか。こんな悩みをすることになる。

キム・ギ Chol=結局、問題は小学1~2年生と高校時代、両極端の体育活動があまりにも欠乏しているということだ。別の見方をすると小・中・高等学校教育が「体育なしで始めて体育なしで終わること」だ。本当に深刻な問題だ。中学校に時数を増やしたのはいいが、この時期だけ体育教育をするか？もしそうなら、それは教育ではない。

■ ポップスが示したスポーツ不平等

キム・チャングム=国がポップスを通じて初等学校4年生から全生徒を対象に体力を評価し、全学年を対象に健康診断をしたのを見ると子供たちの体育活動と健康の重要性を知っているようだ。しかし、現場で子供たちの体育活動の息は塞がれている。

チョ・ミヘ=ポップスを始めた時、文化体育部の諮問委員として関与した。身体能力中心の体力現場から外れたオーダーメイド型体力処方が目的だった。当時、学校当たり500万ウォン以上の当時としては莫大な支援を行い、インボディなどの測定装備を購入するようにした。本当に破格的な政策だった。予算のために躊躇する政府担当者と会い「未来学生たちの健康のために学校当たり500万ウォンはそれほど大きな費用ではない」と話したことがある。国はそのような気持ちで子供たちの体育活動に投資しなければならない。

イム・ソン Chol=ポップスは大半が学校で定着した。私は3月~5月の期間にポップス測定のための体力運動をする。このようにした後、ポップスで1次、2次評価を行い、子供たちが体育活動の結果を感じられるようにする。ほとんどの学校ではインボディ検査がオープンしている。アプリと連携して運動と生活習慣の形成まで連携させる先生たちもいる。

チャ・ミン Chol=小学校でも表面的に定着した。ただし依然として1~2年生の体育が抜けているため、4年生の時から測定してみると偏差が大きい。家庭環境や周辺施設など、置かれている状況によって、全く運動ができず、3年生の時に初めて体力運動に接する生徒が生まれ、格差が現れる。体力運動の動機を得る前に挫折を経験し、自尊心の低下のため身体活動を避ける悪循環に陥ったりもある。

■ 身体が重要な時代、学校体育の正当性

キム・チャングム=公教育が決定的な時期に体育断絶を作るため、不平等のような悪影響が生じる。体育の重要性を強調するが、教育部の体育担当職員は2人だ。言葉と実践が違うのではないか。

金ギ Chol=教科ごとに時代別に当為性と正当性が変わる。このごろは数学が入試と学業の頂点にある。体育は歴史が古い科目であり、それなりに正当性を持って耐えてきた。ところが「これをなぜ教えなけれ

ばならないのか」という当為性を説得力を持って開発できずにいるようだ。時代が変われば、経済や性、保健などの教育分野が浮き彫りになることもある。しかし、体育はいつも論理が似ている。私たちの子供たちの身体発達正義を越える説得力を提示しなければならない。

チョ・ミヘ=教育部の政策立案者たちが他国の事例を見て、体育教育が本当に重要だと感じている。中学校では週当たり時数が3時間を超え、スポーツクラブ活動もある。小学校低学年に体育時間がないのは大きな問題だが、一方では与えられた時間をどれだけ忠実に運営するかを考えなければならない。一部の学校では体育教師が熱心にすれば、保護者が生徒たちを苦しめないようにと言う。このような社会の雰囲気の問題だ。

■ 体育活動の消費者である学生の立場に立つべきだ。

キム・チャングム=生涯周期で見れば、幼い頃の体育活動の経験が一生続く。現場から出てくる不満と改革要求は明らかだ。ところで、なぜ改善されないのか。

チョ・ミヘ=80年代半ば後半の統合教科が大変な話題だった。先進国型教育のように見なされ、一度政策方向を決めて統合に進むと、今や問題点が発見されても統合を解くことは難しい。今回も教育課程改正の雰囲気があった。私も20年以上体育教科の分離について話してきたようだが、それでももっと問題意識を持って接近しなければならない。

小学校の先生たちの本当の声も伝わらなければならない。初等学校教師たちとインタビューをしてみると「体育授業をするのが難しい」、「子供たちに申し訳ないが体育時間に他の授業をする」という話も出ている。ところが教育部アンケート調査では「うまくいっている」と答え、教育部は「うまくいっているのに何が問題なのか」という風になる。研究者は先生たちの本当の声を伝えなければならない。

金ギ Chol=非常に重要な言葉だ。初等学校1~2年生の体育と関連して、現行の統合教科で体育を分科しなければならないと主張する方々が多い。「楽しい生活」で体育、音楽、美術を一緒に付けたことに対する論理的根拠も希薄だ。「賢い生活」のような他の統合教科でも事情は大きく変わらないだろう。2009年の教育課程改正初期に初等学校1~2学年体育科教育課程作業が突然中止された経験がある。初等体育と成長発達の重要性を強調しても最終決定段階でずれる。子どもたちの立場、需要者の立場から考えてほしい。

チョ・ミヘ=学校運動部の学生選手と関連しても同じだ。制度はこれまで大幅に改善された。選手たちはたいてい善良でコーチの言葉なら順応する。コーチや監督が選手の将来のために「勉強しなさい」などの一言でも言うことが重要だ。

■ 施設なしで体育活動なし

金チャングム=施設問題も欠かせない。セウォル号以後に生存水泳が強調されたが、現場で水泳教育の実効性が疑問視されている。改善策はないのか。

チャ・ミン Chol=水泳教育強化の趣旨には共感し、必要だ。また、まだ過渡期なので問題がある。教師の力量が強化されなければならないのに私設時間の講師に多く依存し、プログラムも不足している。インフラや施設では積極的な支援が行われるべきである。特定の時期に学生たちが集まって冬にすることもあつる。教育庁レベルで解決策を見出さなければならない。

金ギ Chol=施設なしでは体育活動はない。水泳教育だけを見ても絶対的にプールが足りない。このような施設を備えるには莫大な財源がかかる。しかし、子供たちの健康が未来の健康という観点から、政策当

局で大規模に投資できる決断が必要だ。学校の機材や用品などを交換するのも良いが、施設を画期的に拡充することが必要だ。

出典：https://www.hani.co.kr/arti/sports/sports_general/1066787.html

02 京郷新聞 2022. 11. 10

運動も勉強もしなければならず「一日がぎりぎり」… 「量より質」科学的訓練のためのインフラが切実



学生選手たちは忙しく、つまづいている。運動もしなければならず、勉強もしなければならない。自分の夢は専門選手になることだが、学校と教育部は学習だけを強調する。学校と教育部は運動方法とインフラには関心がない。結局、学生選手たちは学校で顔色を伺いながら、運動も勉強もまともにできずにいる。

■科学的訓練法を設けるべきだ

学生選手が運動に集中できる時間は減少している。出席認定日数も年々減る。学習の重要性が強調され、正規授業の履修も必須だ。韓国スポーツ政策科学院のチョン・ヒョヌ研究委員は「重要なのは訓練量ではなく質」とし「経験に依存するコーチング法から抜け出し心理学、生理学、疫学などに基づいた科学的訓練法が必要だ」と話した。チョン研究委員は「中学校までは基本教育課程だが、高校からは進路中心の選択過程」とし「学生選手の効率的な運動法が用意されなければならない」と付け加えた。科学的訓練法を指導者個人に任せるには場所、施設、大会方式などで制約が多い。教育当局、競技団体、体育会、地方自治体が膝を突き合わせなければならない理由だ。政府は公共スポーツクラブに学生選手の育成を任せようとしている。チョン研究委員は「スポーツクラブでは長い訓練と合宿が可能だ」として「ところがスポーツクラブ学生選手管理規定がなく事故発生の可能性が非常に高い」と心配した。

■競技団体が主導すべきだ

科学的訓練法は、競技団体がリードしなければならない。指導者が科学的訓練法を学んでこそ、良い選手を育成することができる。チョン研究委員は「スポーツ特化大学、競技団体などが指導者教育にはるかに集中しなければならない」と話した。現在、国内には指導者団体がいくつかある。大部分の指導者の力量強化と教育よりは労働組合の性格で処遇改善を要求することに留まっている。競技団体が幼少年時代の年代別教育方向と指針を提示し、大会運営もこれに合わせてしなければならないという意見も説得力がある。チャンフン高校サッカー部のユン・ジョンソク監督は「大韓サッカー協会がどのような選手をどのように育成するか指導方向を定め、政策を下さなければならない」とし「大学入学に合わせて運営される大会方式も学生選手が全年齢にわたって均等に発展できるよう低学年リーグと低学年大会を強化しなければならない」と強調した。

■施設のない科学的訓練は不可能

学生選手たちは専門選手を夢見る。ユン監督は「基本的に学校施設を自由に利用できるようにしなければならない」とし、「成人中心に貸館される公共施設も学生選手にまず貸さなければならない」と話した。雲山高校のイム・ソン Chol 体育教師は「立ち遅れた校内施設を改・補修し、より安全で良い環境を作らなければならない」と話した。韓国スポーツ政策科学院のソン・エジョン研究委員は「韓国大学スポーツ協

議会(KUSF)が運動部のある大学に支援金を与えているので、大学施設を高校生選手たちに貸すことも検討してみる価値がある」と話した。

専門施設の建設を主張する意見も多い。韓国スポーツ政策科学院のユ・ジゴン首席研究委員は「地方自治体が管内に多様な種目の学生選手たちが天気、時間などに関係なく自由に使える専門施設を建てることを検討しなければならない」と勧告した。チョン・ヒョヌ研究委員は「政府が毎年数千億ウォンを支援し地方に公共体育施設を建てている」として「財源をさらに確保し専門選手用施設新築に使わなければならない」と提案した。

出典：<https://www.khan.co.kr/sports/sports-general/article/202211102240015>

03 スポーツ京郷 2022.11.13

[学生選手を生かそう]オーダーメイド型学習、大学入試要項の変更が答えだ



学生選手はプロ選手を夢見る「学生」だ。それで勉強ももちろんしなければならない。ところが、社会は学習当為性を要求するだけで、解決策には無関心だ。正規授業に運動部を

入れれば、すべてが解決されると勘違いする教育者も多い。学習効果は生活と関連した時に高くなる。学生選手たちに学習に対する内的、外的動機を教育界が付与しなければならない。

■**短期体育特性化、長期オーダーメイド型授業**=体育特性化過程は体育進路を望む生徒を一つのクラスにまとめて運営する学級だ。地域ごとに異なるが、特性化学級の内申成績は学級内だけで集計される。松谷高校のユシン体育教師は「学生選手が自分たちどうして競争する特性化学級に入れば学習態度が変わる」とし、「今も運動部を運営する少なくない高校が体育特性化学級を運営している」と話した。

2025年からは高校単位制が全面施行される。学生が進路に合わせて希望する科目を選択する制度だ。高校単位制の下ではクラス別の内申算定が不可能で、体育特性化クラスを運営する意味が弱くなる。クアンムン高校のイ・ヒョヌ体育教師は「運動部がある学校は学生選手の授業課程運営を義務化するよう教育部方針に入れなければならない」とし、「進路に合わせたレベル別、オーダーメイド型学習だけが学習反感を減らし、効果も高めることができる」と話した。

■**小中時代の学習習慣が先に**=中学校までは義務教育だ。中学校までは学生選手も学業をきちんとしなければならない。しかし、授業を疎かにする雰囲気は依然として残っている。イ・ヒョヌ教師は「小中学校時代から学業習慣を持たなければ高校正規授業についていけない」と話した。

教育界は学生運動部を学校から引き離そうとしている。韓国スポーツ政策科学院のチョン・ヒョヌ研究委員は「運動部を学校から切り離すと学習はより難しくなる」として「学生運動部がスポーツクラブに出ると、学校とクラブ共に学習をまともに管理できない」と心配した。クラブで運動する学生選手学習に対する管理および評価指針を教育部、文体部などが樹立しなければならない理由だ。チョン研究委員は「学生選手たちも勉強をしてこそ科学的指導力量を備えた指導者になったり他の進路に進むことができるということを覚えなければならない」と話した。

■大学入試要綱変更がカギ=出席許容日数調整などでは学生選手の学業問題を根本的に改善できない。小中時代の徹底した基本学習、高校オーダーメイド型授業が必要だ。大学が入試要綱に学習能力の反映率を高めれば、一気に解決される。ベミョン高校のチョン・ハンウク体育教師は「大学が最低学力制の下限を高めた。だが、実際は普通の学生選手なら合わせるができる」とし、「その上、入試で実際の内申反映率は1~2%に留まる」と指摘した。ハードルを下げると学生がたくさん集まる。大学は不足している新入生を充当し、体育大学の競争率も高めることができる。

学習時間確保のため大学入試に競技実績が反映される大会を選別しなければならないという意見もある。チョン・ヒョヌ研究委員は「大会が多すぎるので、学生選手が大会出場だけに多くの時間を費やしている」として「教育部と文体部が競技実績が反映される権威ある大会を選ばなければならない」と話した。

出典：https://sports.khan.co.kr/sports/sk_index.html?art_id=202211131412003&sec_id=530101&pt=nv

04 スポーツ朝鮮 2022.11.08

障害・非障害学生-教師の幸せな思い出作り、感動のソウルリム運動会



「ただの友達です。」

障害-非障害学生たちの目からは互いの「違い」を見つけることができなかった。ただ同じクラスで一緒に勉強し、一緒にご飯を食べて、一緒に運動する「友」だった。障害の壁を崩し、ソウルで森のように調和する「みんなの運動会」、障害学生体育フェスティバル「2022 ソウルリム運動会」の風景だった。

障害-非障害学生たちがソウルの空の下で「一つ」になった。5日、ソウル蚕室ソウル特別市教育庁学生体育館では「障害学生体育フェスティバル2022 ソウルリム運動会(主催ソウル市障害者体育会、スポーツ朝鮮/後援ソウル特別市、ソウル特別市教育庁、文化体育観光部、大韓障害者体育会/協賛SKテレコム、フィラコリア、エルロエル、コーウェイ、リリアス、ノイフェリーチェ、スポパーク、SKナイツ、FCソウル、LGツインズ)が開かれた。

「ここで今、私たち一緒に-Breaking Down Barriers(壁を崩しながら)」をスローガンにしたソウルリム運動会は、全国17市道のうちソウル市で今年初めて試みた「統合体育」運動会だ。国家的に難しい時期、同行と共存、統合の意味を再確認した「ソウルリム運動会」にはソウル市管内20の中高校から計179人の障害・非障害学生たちが参加した。

この5ヶ月間、校内ソウルリム統合スポーツクラブで4つの正式種目(バスケットボールゴール下シュートリレー、ビッグバレーボール、スタッキングリレー、団体縄跳び)の中から2つを選んで呼吸を合わせてきた20校の「選手」たちが一堂に会した。和合種目(大きなボール転がし、ビンバックバスケットボール、団体リレーなど)、「ドリームパラリンピック」体験種目(ボッチャ、ショーダウン、車椅子バドミントンなど)も一緒に楽しんだ。

和合種目で体をほぐした生徒たちは、順位を決める正式種目に突入すると、目つきが変わった。額にぽつぽつとついた汗が、すぐにTシャツを濡らすほどだった。「魔の種目」は団体縄跳び(6人)だった。2人が縄を回し、4人が走る種目で1分ずつ2回の機会が与えられたが、体力が枯渇した生徒たちがたびたび目についた。しかし、問題はなかった。辛くて転んでも残りの生徒たちが「大丈夫。もう一度やろ

う」と叫びながら友達を起こした。体力が尽きた生徒も、友人や教師らの応援に唇をかみしめ、最後まで最善を尽くす姿だった。「絶対に諦めない人に勝つのは難しい」という米国の伝説的な野球選手ベーブ・ルースの名言が「ソウルリム」コートの上にはためいた。

もう一つの感動は「スタッキングリレー」で起こった。特殊製作された大きなカップを素早く3段階に積み上げた後、折り返し点を回って再び重ねる種目で、ある障害学生はスピードより精巧さに焦点を合わせた。順位争いのためには「早く！」と叫ばなければならない状況。しかし、誰も「早く！」という言葉をつき出さなかった。むしろ「遅れても大丈夫。できる、最後まで！あきらめるな」と拍手を送った。結局、この障害学生は最後まで自分の役割を果たす執念を見せた。

この4~5ヶ月の練習を通じて実戦で独歩的な実力を誇った学校もあった。芳遠中学校だった。バン・ウォンジュンがバスケットボールリレーとスタッキングリレーで2冠王に輝いた。「30代女性教師ペア」キム・ヨングバンウォン中学校特殊教師とキム・イェナ体育教師は「障害・非障害学生たちがソウルリム運動会を準備しながら大きく明るくなった。主導的に変わった」と声を一つにした。キム・ヨング特殊教師は「非障害学生たちがバスケットボールができない私に代わって障害学生たちに方法を細かく教えてくれた。ゆっくりと発展する姿をそばで見守りながら、心から喜び、応援してくれる姿に深い感動を受けた」と話した。

団体縄跳び高等部1位を占めたムンジョン高校のイ・ハリム特殊教師は「ソウルリム運動会を準備しながら同じクラスの友達同士でさらに気遣う姿を見ることができた。子供たちがみんな楽しそうだった」と耳打ちした。スタッキングリレー高等部1位になったヒョムン高校のチョ・チョルウン君は「高3なので現場実習に行っていて練習時間が3週間しかなかった。諦めたかったが、諦めたら『一緒に』する意味がないようで最後まで最善を尽くした」と笑った。

出典：<https://sports.chosun.com/news/ntype.htm?id=202211090100058590007503&servicedate=20221108>

05 スポーツウデイ 2022. 11. 14

カタールワールドカップ労働者の人権問題など内外のノイズが続く… ボイコットの動きも



世界各国の「祭りの場」になるべきW杯がサッカーではなく他の問題で騒がしい。中東で行われる初めてのワールドカップであるカタールワールドカップは、初めて開催地に選定されてから今まで大規模インフラ構築のために投入した労働者の人権問題から自由ではなかった。紆余曲折の末に開幕を控えた

が、人権問題を解決できなかったカタールW杯をボイコットすべきだという動きが起きている。

人口が300万人にも満たない小さな都市国家であるカタールは、2010年に開催地に選定された後、W杯インフラ構築に向けた本格的な作業に着手した。

南アジアおよびアフリカからカタールに向かった移住労働者がワールドカップ競技場と空港、道路、地下鉄建設に投入された。このようなインフラ構築に約2200億ドル（約290兆ウォン）の天文学的な金額が費やされた。

これは 2018W 杯開催国であるロシアが支出した費用（116 億ドル）や 2014W 杯開催国であるブラジルが支出した費用（150 億ドル）をはるかに上回る水準だ。

このような途方もないインフラを建設したカタールは「移住労働者の疲労でワールドカップ競技場を建てている」という批判を受けることになる。ヒューマンライトウォッチ(HRW)、アムネスティなど国際人権団体は数百人の労働者が週 60 時間以上の強制労働に苦しめられてきたと伝えた。

カタールは 2014 年、カリファ国際競技場建設現場で移住労働者搾取論難が提起された後、処遇改善を約束した。これに伴い、2017 年労働時間制限、紛争解決委員会設立、賃金支給保障、出国許可制(雇い主が移住労働者移動を統制できる制度)廃止など改革がなされた。

だが、昨年 11 月国際アムネスティは 48 ページに達するカタールワールドカップ移住労働者の人権実態に対する報告書を発刊、労働改革が多数なされたにもかかわらず労働者が依然として賃金未払いと劣悪な労働環境に置かれていると批判した。また、英国ガーディアンは自主調査を通じてカタールワールドカップのインフラ建設のために労働中に死亡した労働者数だけで 6700 人余りに達すると明らかにした。

また、最近ではカタール政府がワールドカップ観光客宿泊地域近隣のアパートに泊まっていた外国人労働者数千人を強制的に追い出したということも知らされた。

しかしカタールはすでに 2020 年以後、17 ヶ国 3 万 6000 人余りの労働者に 1 億 6400 万ドル(約 2353 億ウォン)の補償金を支給し、実際に競技場建設現場で死亡した労働者は 3 人だと主張するなど、このような事実を認めていない。

この他、イスラム教を国教とするカタールは同性愛と性転換を不法に規定したことで、性的少数者差別問題も浮き彫りになった。これに対する批判も相次ぐと、カタールは同性愛を禁止する法を一時的に中断することにした。しかし、性的少数者が排除されかねないという懸念は依然として残っている。

このような状況で W 杯開幕を目前に控えた今、人権団体の批判の声に続きボイコットすべきだという動きが国際社会に広がっている様子だ。

まず、豪州はカタール W 杯参加国の中で真っ先にカタール人権問題を指摘する放送に出演した。また、赤色と白色ユニフォームを国家代表ユニフォームとして着るデンマークは犠牲になった外国人労働者を哀悼する黒いユニフォームを用意した。

イングランドとウェールズの選手たちはカタールの性的少数者差別に抗議する意味で虹の腕章をつけ、欧州 8 ヶ国の代表チームは各国の主将が試合中にハート形の腕章をつける方式でオランダが主導する差別禁止キャンペーンに参加する。

2018 ロシア W 杯で優勝したフランスでは、パリやストラスブールなどの大都市を中心にカタール W 杯街頭中継ボイコットを宣言した。

このような動きに FIFA は 4 日、カタール W 杯に参加する 32 カ国に「サッカーは理念的・政治的争いに巻き込まれてはならない」と述べ、カタール W 杯の人権侵害疑惑を葬ろうとする書簡を送った。

FIFA の立場が出ると、今回は欧州 10 チームのサッカー協会が直ちに反発の立場を示した。

イングランドサッカー協会によると、イングランド、ベルギー、ドイツ、オランダ、ポルトガル、ノルウェーなど欧州 10 チームのサッカー協会は共同声明を通じてカタールが自国内の外国人労働者の人権改善措置に乗り出すことを促した。また「移住労働者補償基金準備と移住労働者センター設立のために FIFA を継続圧迫する」と強調した。

しかし、南米サッカー連盟はこれに反対の立場を示した。連盟は「サッカー界にカタールW杯に対する支持を促す」とし「最も人気のあるスポーツであるサッカーは政治的、理念的論議・対立を越えて普遍的なメッセージを伝達しなければならない」と明らかにした。欧州、米国、オーストラリアなど西側とは相反する立場だ。

中東で初めて開かれるW杯であり、史上初めて冬に行われるカタールW杯は、サッカー史にすでに特別な記録を残した。しかし、その特別さがW杯をめぐる様々な議論に広がり、開幕直前まで互いに相反する立場を表明して対立している。サッカーではなく、その向こうの問題で発生した雑音は、カタールW杯を見ることになる全世界のサッカーファンに苦い後味を残しそうだ。

出典：<https://v.daum.net/v/20221114113403446>

06 週刊スポーツニュース

FIFA「デンマーク、人権メッセージが盛り込まれたトレーニングウェアは着用できない」

<http://www.ngonews.kr/136752>

水原市体育会「才能寄付プログラム」を運営し体育福祉を拡大

<http://www.joongboo.com/news/articleView.html?idxno=363565987>

光州市教育庁「学校運動部指導者清廉および暴力予防」力量強化教育実施

<https://www.wikitree.co.kr/articles/806132>

キム・アラン、ファン・デホン、首相杯全国男女ショートトラック大会出場

<https://isplus.com/2022/11/09/sports/sportsgeneral/20221109162531072.html>

チュンナム高校のユン・ヨンチョル、デソン高校のチェ・ドンウォン賞受賞

https://newsis.com/view/?id=NISX20221109_0002079975&cID=10502&pID=10500

フットサル人たちの熱い情熱、青陽公設運動場を盛り上げた。

<http://www.joongdo.co.kr/web/view.php?key=20221113010003947>

韓国取引所、釜山地域の小中高スポーツ選手に奨学金を後援

<https://www.newspim.com/news/view/20221108001095>

KBO、少年院・児童施設のティーボール支援…引退選手たちの才能寄付

<https://www.yna.co.kr/view/AKR20221110049600007?input=1195m>

アルピナ「スポーツ体験プログラム」参加団体募集

<https://daily.hankooki.com/news/articleView.html?idxno=892948>

体育市民連帯オンライン 定期後援案内

万人が楽しむスポーツ世界、体育市民連帯が共に作ります。
私達連帯の活動に積極的に賛同していただくことを願います。

私たち体育市民連帯は体育人の権益保護と
福祉実現のために努力しています。
皆さんの小さな心づかいがより良い世界のための
体育市民連帯活動に強固な土台となります。
体育市民連帯会員として力になろうと
される方は下の口座に後援をお願いします。

国民銀行 086601-04-095940

口座名義：体育市民連帯

オンライン定期後援は下のリンクを通じてホームページからできます。

多くの関心をお願いします。

INFOMATION

体育市民連帯 ソウル市 瑞草区 瑞草洞 孝寧路 230 スンジョンビル 407 号

Tel : 02-2279-8999、E-mail : sports-cm@hanmail.net ホームページ : <http://www.sportscm.org/>

日本語訳：佐藤好行 新日本スポーツ連盟 国際活動局 韓国担当 jr1fep@gmail.com

週刊ニュースレターバックナンバー（資料室） <http://www.yg.jpn.org/sportscm/index.html>